

クララ・シューマン

現地調査に見る活動の軌跡

川嶋 ひろ子

Clara Schumann:

Traces of Activities as Seen in On-the-Spot Survey

KAWASHIMA Hiroko

Abstract

I have been doing scholarly research on Clara Schumann for many years, and have read plenty of books and papers about her. Throughout the twists and turns in her life of glory, I really cannot help admiring her way of life filled with profound vitality, despite much anguish. In this context, I conducted a field survey by visiting the places where she used to live and tracing her activities. The reason for this survey was that the vitality of Clara's activities and background would come to light more clearly.

In Germany, the places of residence have changed very often during the past 100 years, and there are places where town streets have undergone great changes. I started to make inquiries at local city halls, checking out the addresses of Clara in the 1800's. I found that she had lived at 14 different places in her whole life, and at the same time she held countless concerts both in and out of the country. Although it can be considered natural, judging from the vitality of Clara's activities and her profound enthusiasm for the arts, reacting to and escaping from the burden of sorrow from losing her mother, husband and children certainly stimulated her to action. In this paper I explore the lifetime of Clara Schumann and the background to her marvelous activities through an on-the-spot survey.

Key Word: Clara Schumann, Musicians of German Roman School, On-the-spot survey of Germany

[要約]

今まで長年クララ・シューマンの研究に携わり、多くの書物や資料を見てきた。クララの栄光と苦難に満ちた生涯において、悩み苦しみながらもバイタリティー溢れる生き方を通してのことには敬服するのみである。そこで彼女が実際に住んだ場所を訪れ、彼女の行動の軌跡を調べることで、彼女の活動の原動力や背景がより鮮明に見えて来るのではないかと思い、現地調査を試みた。

ドイツではこの100年ほどの間に住所表示が度々変わり、町並みすらすっかり変わってしまっている所もある。1800年代の住所を文献で調べ、現地の市庁舎に問い合わせる作業から始まった。クララはその一生において14ヶ所に移り住み、それと共にドイツ国内はもちろんのこと、諸外国への演奏旅行を数え切れないほどに行っている。クララの活動の原動力

として芸術への情熱は当然考えられるが、母親、夫、子供を失うという悲しみからの反動や逃避が彼女を駆り立てたとも考えられる。クララ・シューマンの生涯と、その驚異的な活動を可能にした背景を現地調査により探ってみた。

キーワード：クララ・シューマン、西洋音楽史、ドイツ現地調査

はじめに

クララ・シューマンはドイツ・ロマン派を見事に生き抜いた女性と言えるのではないだろうか。父親から世界的ピアニストに育てられ、ロベルト・シューマンの妻として彼の仕事を支え、7人の子供を育てながら演奏活動に明け暮れ、後進の指導や作曲にも力を入れ、後世の音楽界に計り知れない影響を及ぼした。本研究では彼女の活動をつぶさに見るとともに、彼女が住んだ街を中心に現地を調査・観察し、活動の背景を探る事により、彼女の活動の心的要因及び外的要因を考察してみる。

1. 居住地と略歴

年	地名：住所 略歴
1819-1821	Leipzig : Hohe Lilie am Neumarkt
1819	9月13日 クララ生まれる。父フリードリヒ・ヴィークは楽器商兼ピアノ教師、母マリアンネはピアニスト。
1821-1840	" : Grimmaische Gasse 36 (現在 Salzgäßchen)
1824 (5歳)	5月 両親の離婚。クララ、父親の指導によりピアノを始める。
1825 (6歳)	8月 母マリアンネはアドルフ・バルギールと再婚し、ベルリンに住む。 10月 初めて人前で演奏。
1828 (9歳)	3月 カールス家の集まりで演奏。18歳の学生ロベルト・シューマン、これを聴いてヴィークの弟子となる。 7月 父親再婚。 10月 クララ、ゲヴァントハウスで演奏会。
1830 (11歳)	3月から4月 ドレスデンに最初の演奏旅行。 (パリで7月革命、ハノーヴァーなどで暴動、立憲運動。) 10月 ロベルト、ヴィーク家に住み込む。 11月 ゲヴァントハウスで、初めてのソロコンサートを開催する。 作品1. 4つのポロネーズ (Quatre Polonoises Op.1) を作曲。
1831 (12歳)	9月 ワイマール、フランクフルトなどを経てパリに演奏旅行、翌年5月に帰る。ワイマールでゲーテに、パリでメンデルスゾーン、ショパンに会う。
1832 (13歳)	7月 ゲヴァントハウスで演奏、ヴィルティオーソとして認められる。 秋 ツヴィッカウでロベルト・シューマンの作品を演奏。
1833 (14歳)	1831-32、作品2. ワルツ形式によるカプリス集 (Caprices en forme de Valse Op.2) を作曲。 ライプツィヒ、シェムニッツ、カールスパッド、シュネーベルクで演奏。 作品3、ロマンスと変奏 (Romance varié Op.3) を作曲。
1834 (15歳)	ドレスデンへ演奏旅行。翌年4月 にかけてマゲデブルク、ヘルムシュテート、ブラウンシュヴァイク、ハノーヴァー、ブレーメン、ハンブルクに演奏旅行。 声とピアノのためのワルツ、ヨハン・ペーター・リーザーによる (Walzer für Gesang und Klavier, Text by Johann Peter Lyser) を作曲。

1835 (16 歳)	夏 ツヴィッカウに演奏旅行。この頃からロベルトと親交が深くなる。 10月 ショパンがヴィーク家を来訪。 11月 メンデルスゾーンの指揮により、ゲヴァントハウスにおいてクララの作品であるピアノ協奏曲第一番を演奏。 秋から翌年春 にかけてドレスデンなどに演奏旅行。 (ドイツ最初の鉄道開業。約 5000km の鉄道網があった。) 1833~35、作品 7 . 管弦楽 (または五重奏) の伴奏付きピアノ協奏曲第 1 番 (<i>Premier Concert pour le Piano-Forte avec accompagnement d'Orchestre <ou de Quinour> Op.7</i>) 作品 4 . ロマンのワルツ集 (<i>Valses Romantiques Op.4</i>) 作品 5 . 4 つの性格的小品 (<i>Quatre Pièces caractéristiques Op.5</i>) を作曲。
1836 (17 歳)	ロベルトと会うことを父親に禁じられるが、ひそかに文通を続ける。 ナウムブルク、イエナ、ヴァイマルなど近隣の都市に演奏旅行。 作品 6 . 音楽の夜会 (<i>Soirées Musicales Op.6</i>) を作曲。
1837 (18 歳)	2月から5月 ベルリン、ハンブルク、ドレスデン、ブレーメンなどに演奏旅行。ベルリンで母親に再会。 8月 ロベルトがクララに求婚、父親ヴィークに拒否される。 10月から翌年5月 にかけてプラハ、ウィーンなどに演奏旅行。 作品 8、ベッリーニの「海賊の歌」にもとづく演奏会用変奏曲 (<i>Variations de Concert sur la Cavatine du Pirate, de Bellini Op.8</i>) を作曲。
1838 (19 歳)	3月 女性としては初めての「オーストリア帝王室内楽奏者」の称号を与えられる。 ウィーン楽友協会名誉会員に指名される。 作品 9 . ウィーンの思い出 (<i>Souvenir de Vienne Op.9</i>) 作品 10 . スケルツォ (<i>Scherzo Op.10</i>) を作曲。
1839 (20 歳)	2月から8月 ホフ、ニュールンベルク、アンスパツハ、シュトゥットガルト、カールスルーエ、パリなどへ、父親を伴わずに演奏旅行。 8月 ロベルトと2年ぶりに再会。ライプツィヒの裁判所に、ヴィークに対して結婚許可のための訴訟を起こす。 9月 父親と決別。結婚するまでの期間、家を出てベルリンの母親の元で暮らす。 作品 11 . 3 つのロマンス (<i>Trois Romances Op.11</i>) を作曲。
1840 (21 歳)	1月 結婚資金のため母親と共にシュテッテン、シュトゥットガルト、ハンブルク、ブレーメン、リュベックに演奏旅行。 8月 判決が下り勝訴。
1840~1844	" : Inselstraße 5 (現在の表示 18)
1840 (21 歳)	9月12日 (誕生日の前日) ライプツィヒ近郊のシェーネフェルトで結婚式。ライプツィヒ市内の Inselstraße 5 に住む。 「海辺にて」 _、 ロバート・バーンズの詩による (<i>Am Strand, Text by Robert Burns</i>) 「民衆歌」 _、 ハインリッヒ・ハイネの詩による (<i>Volkslied, Text by Heinrich-Heine</i>) を作曲。
1841 (22 歳)	3月 ゲヴァントハウスで結婚後初めての演奏会。9月 長女マリーを出産。 「おやすみ」 _、 フリードリヒ・リュッケルトの詩による (<i>Die Gute Nacht, Text by Friedrich Rückert</i>) 作品 12、F.リュッケルトの「恋の春」からの12の詩。ロベルトとクララ・シューマン作曲による声とピアノのための作品 (<i>Zwölf Gedichte aus F.Rückert's Liebesfrühling für Gesang und Pianoforte von Robert und Clara Schumann Op.12</i>) の第 2, 4, 11 曲を作曲。
1842 (23 歳)	2月 マグデブルク、ブレーメン、コペンハーゲンなどに演奏旅行。7月 ボヘミア地方に演奏旅行。 秋 ロベルト発病。 1840~42 作品 13、6 つの歌曲 (<i>Sechs Lieder Op.13</i>) 1841~42 ソナタ ト短調 (<i>Sonate G moll</i>) を作曲。
1843 (24 歳)	1月 ヴィークと和解。4月 二女エリーゼを出産。 「ローレライ」 _、 ハインリッヒ・ハイネの詩による (<i>Loreley, Text by Heinrich-Heine</i>) 「別れのつらさ」 _、 フリードリヒ・リュッケルトの詩による (<i>O weh des Scheidens, Text by Friedrich Rückert</i>) を作曲。
1844 (25 歳)	1月から5月 ロシアへ演奏旅行。ロベルトの病いが重くなる。 作品 14、スケルツォ第2番 (<i>Deuxième Scherzo Op.14</i>) 1840~44 作品 15、4 つの幻影 (<i>Quatre Pièces Fugitives Op.15</i>) 即興曲 (<i>Impromptu</i>) を作曲。
1844~1846	Dresden : Waisenhausgasse 35 (現在 Waisenhausstraße 35) Seestraße との角。
1844 (25 歳)	12月 ドレスデンに移る。

1845 (26 歳)	3 月 三女ユーリエを出産。秋 ドレスデン、ライプツィヒで演奏活動。 作品 16、3 つのプレリュードとフーガ (<i>Präludien und Fugen Op.16</i>) を作曲。
1846 (27 歳)	2 月 長男エミール出産。
1846-1850	" : Reitbahngasse 20
1846 (27 歳)	9 月 「日光が差し込む明るい住居」に引っ越す。 11 月から翌年 2 月 長女マリー (5 歳) 二女エリーゼ (3 歳) ロベルトと共にウィーンに演奏旅行。 「わが星」 「別れのとき」 フリーデリーケ・ゼレの詩による (<i>O du mein Stern, Beim Abschied, Text by Friederike Serre</i>) 作品 17、ピアノトリオ ト短調 (<i>Trio G moll Op.17</i>) を作曲。
1847 (28 歳)	1 月 ウィーンからプラハへ。2 月 ドレスデンに戻るが、ロベルトの『楽園とペリ』上演のためベルリンに向かう。3 月 ドレスデンに戻る。 6 月 長男エミール (1 歳) 死亡。 7 月 ツヴィッカウでシューマン音楽祭
1848 (29 歳)	1 月 二男ルートヴィヒを出産。(2 月 パリで革命) 混声合唱曲「ヴェネツィアの夜の祝祭」「前へ」「黄金の香油入れ」 エマヌエル・ガイベルの詩による (<i>Abendfeyer in Venedig, Vorwärts, Goldoliera, Text by Emanuerr Geibell</i>) を作曲。
1849 (30 歳)	5 月 ドレスデンで暴動、近郊のマクセンに避難。 7 月 三男フェルディナンドを出産。
1850 (31 歳)	3 月 ライプツィヒ、ハンブルク、ブレーメンへ演奏旅行。ハンブルクでのクララのコンサートをブラームスが聴く。
1850-1851	Düsseldorf : Alleestraße 782 (現在 Heinrich- Heine- allee 44)
1850 (31 歳)	9 月 ロベルトがデュッセルドルフの音楽監督となり、デュッセルドルフに移り住む。 11 月 デュッセルドルフでソロコンサートを開催。
1851-1852	" : Königsallee 252,4 (現在 46)
1851 (32 歳)	7 月 目抜き通りの斜め向かいに位置する「音楽サロン」のある住居に引っ越す。 7 月 ロベルトと共に南ドイツ、スイスに休暇旅行。 9 月 リストがシューマン家を来訪。 12 月 四女オイゲーニエを出産。
1852 (33 歳)	3 月 ライプツィヒでのシューマン週間でリストらと共演。
1852、4-8 月	" : Herzogstraße
1852 (33 歳)	4 月 それまで住んでいた家が売られることになり、街の中心からやや離れた新興住宅地に転居。
1852-1855	" : Bilkerstraße 1032 (現在 15)
1852 (33 歳)	9 月 夫婦それぞれが迷惑にならない音楽室を持てる住居に移る。
1853 (34 歳)	5 月 デュッセルドルフでのライン音楽祭で演奏。 10 月 ブラームス (20 歳) が来訪。 11 月 事実上指揮者を辞任したロベルトを伴いオランダに演奏旅行。 作品 20、ロベルト・シューマンの主題によるピアノのための変奏曲 (<i>Variationen für das Pianoforte über ein Thema von Robert Schumann Op.20</i>) 作品 21、3 つのロマンツェ (<i>Drei Romanzen Op.21</i>) 作品 22、ピアノとヴァイオリンのための 3 つのロマンツェ (<i>Drei Romanzen für Pianoforte und Violine Op.22</i>) ロマンツェ イ短調 (<i>Romanze A moll</i>) 作品 23、ヘルマン・ロレットの「ユクンデ」からの 6 つの歌曲 (<i>SechsLieder aus Jucunde von Hermann Rollet Op.23</i>) 「すみれ」 ヨハン・フォン・ゲーテの詩による (<i>Das Veilchen, Text by Johan von Goethe</i>) を作曲。
1854 (35 歳)	1 月 ハノーヴァーにロベルトと共に演奏旅行、ブラームスらと共演。 2 月 ロベルト、ライン河に投身自殺を図り未遂に終わる。 3 月 ロベルト、エンデニヒの精神病院に入り、ブラームスがクララを助け支える。(ブラームスはシューマン家の近くに下宿) 6 月 四男で末子のフェリックスを出産。 7 月 ベルリン、8 月 ベルギーへ演奏旅行。 10 月から 12 月 にかけてベルギー、ハノーヴァー、ライプツィヒ、フランクフルト、ハンブルク、リュベック、ブレーメン、ベルリンに演奏旅行。

1855 (36 歳)	1月 ネーデルランド地方、2月 ダンツィヒ、3月 ベルリン、ポメラニア、5月 デュッセルドルフで演奏。 秋からのシーズンにはウィーン、ブラハへ演奏旅行。
1855-1857	#: Poststraße 1315 (現在 25) Haroldstraße との角。
1855 (36 歳)	8月 Bilkerstr.に程近いPoststr.に転居。ブラームス(22歳)も同ジアパートの1部屋を借り、演奏旅行に出るクララの留守を守る。またエンデニヒにシューマンを見舞い、クララの旅行先に様子を伝える。 ロマンツェ (Romanze) を作曲。
1856 (37 歳)	1月から3月 ウィーン、ブタペスト、ブラハへ演奏旅行 4月から7月 イギリスで26回の演奏会。デュッセルドルフに戻るとロベルトの病状悪化の電報があり、7月14日、23日の2回エンデニヒを訪れるが面会禁止。 27日 面会を許可されるが29日にロベルト死亡(46歳)。31日 ボンで葬儀、埋葬。 秋 ドイツ各地、デンマークに演奏旅行。
1857 (38 歳)	春 イギリス、スイスに演奏旅行。ブラームスやヨアヒムとの研究も熱心に続ける。リウマチの発作が起きて腕に痛みを覚える。
1857-1863	Berlin : Dessauerstraße 2
1857 (38 歳)	9月 デュッセルドルフの住居からベルリンの母親の元に引っ越す。上の二人の息子はボンの寄宿舎に残り、あとの子供達はベルリンに住む。
1858 (39 歳)	南ドイツ、スイス、オーストリア、ハンガリーなどへ演奏旅行。
1859 (40 歳)	ドイツ各地、オランダ、イギリスなどに演奏旅行。この頃より春のシーズンにはロンドンに行くのが恒例となる。
1860 (41 歳)	オランダ、オーストリアに演奏旅行。 ツヴィッカウに生誕50年のロベルト碑。
1861 (42 歳)	北ドイツ、ベルギーに演奏旅行。
1862 (43 歳)	スイス、フランス、ベルギーに演奏旅行。 10月 バーデン・バーデンに小さな家を買う。
1863-1873	Baden-Baden : Lichtental Nr.14 (現在 Lichtentaler Hauptstraße 8)
1863 (44 歳)	1月 からオランダ、フランス、ベルギーに演奏旅行。 5月 子供たちを集め、バーデン・バーデンに住み始める。 秋 北ドイツに演奏旅行。
1864 (45 歳)	年の始め に20年ぶりにロシアへ。冬デュッセルドルフ、北ドイツに演奏旅行。
1865 (46 歳)	1月 から東ドイツ、ポヘミア地方、イギリスに演奏旅行。秋はフランクフルトなどで演奏。この頃からシ - ズンには演奏旅行、夏はバーデン・バーデンで子供たちや友人たちと休暇を過ごす。
1866 (47 歳)	オーストリア、ハンガリーに演奏旅行。デュッセルドルフ、バーデン・バーデン、フランクフルト、ライプツィヒ、ケルン、ボンなどで演奏会。
1867 (48 歳)	ドイツ各地を経てイギリスへ演奏旅行。 (1867年、明治元年)
1868 (49 歳)	ベルギー、イギリス、オーストリア、ハンガリーに演奏旅行。
1869 (50 歳)	オランダ、イギリス、オーストリアに演奏旅行。 9月 三女ユーリエ結婚してイタリアへ。
1870 (51 歳)	イギリスへ演奏旅行。 長男ルートヴィヒ、精神病院に入院(22歳)。 三男フェルディナント、普仏戦争に召集される(21歳)。
1871 (52 歳)	オランダ、イギリスに演奏旅行。 9月 三男フェルディナント帰還したがリウマチに冒されていた。医者不注意からモルヒネ中毒になる。
1872 (53 歳)	イギリス、オーストリア、ハンガリーに演奏旅行。 3月 母親マリアヌ・バルギール、ベルリンで死亡。 11月 三女ユーリエ、バーデン・バーデンで結核のため死亡(27歳)。
1873 (54 歳)	ベルギー、イギリスに演奏旅行。 8月 三男フェルディナント結婚。8月 ボンでシューマン祭が盛大に行われる。 10月 父親ヴィーク死亡(88歳)。

1873-1878	Berlin : In den Zelten 11
1873 (54 歳)	11 月 バーデン・バーデンからベルリンに移転。長女マリー、四女オイゲーニエと住む。
1874 (55 歳)	リウマチ悪化の為、活動が衰えていく。
1876 (57 歳)	オランダ、イギリスに演奏旅行。
1877 (58 歳)	オランダ、イギリス、スイスに演奏旅行。 11 月 二女エリーゼ結婚してアメリカへ。 ブラームスと『シューマン全集』の編集を始める。
1878-1896	Frankfurt am Main : Myliusstraße 32
1878 (59 歳)	9 月 フランクフルト音楽院教授になり、フランクフルト・アム・マインに長女マリー、四女オイゲーニエ、末子フェリックスと住む。 10 月 フランクフルトとライブツィヒで演奏生活 50 周年の祝賀会が催された。
1879 (60 歳)	2 月 フェリックス結核のため死亡 (24 歳)。 ブラームスと『シューマン全集』をブライトコブ・ウント・ヘルテル社から出版。スイスに演奏旅行。 行進曲 (Marsch) を作曲。
1880 (61 歳)	5 月 ボンのシューマンの墓地に記念碑が建てられる。 スイス、イギリスに演奏旅行。
1881 (62 歳)	春「王立音楽アカデミー」のメンバーとなってロンドンから戻る。 二女エリーゼ、アメリカから家族とフランクフルトに越してくる。 12 月 サン・サーンスがクララを来訪。
1882 (63 歳)	イギリスに演奏旅行。 フランクフルトで住んでいる家を買取る。 ドイツ、スイス、イタリアに演奏旅行。
1883 (64 歳)	オランダに演奏旅行。
1884 (65 歳)	イギリスに演奏旅行。聴覚が衰え始める。
1885 (66 歳)	『シューマンの若き日の手紙』を編集、発刊。
1886 (67 歳)	イギリスに演奏旅行。
1887 (68 歳)	三男フェルディナンドのモルヒネ中毒がひどくなり、彼の 6 人の子供たちの面倒をクララが見る。 イギリスとスイスに演奏旅行。
1888 (69 歳)	イギリスに 19 回目の演奏旅行、これが最後となる。
1889 (70 歳)	9 月 ウィルヘルム皇帝から「芸術への功績」に対して黄金のメダルを受ける。
1891 (72 歳)	3 月 最後の演奏会。肺炎にかかる。 6 月 三男フェルディナンド、モルヒネ中毒による衰弱のため死亡 (42 歳)。
1892 (73 歳)	音楽院の教授を退くが、家で教え続ける。聴覚が著しく衰える。 四女オイゲーニエ、イギリスで結婚し、ピアニストとしても成功する。
1895 (76 歳)	6 月 長女マリーと共にデュッセルドルフを訪問。 10 月 ブラームスの最後の訪問。 小曲集 (Vorspiele) プレリユードと学習者のためのプレリユード集 (Präludium und Präludien für Schüler) をまとめる。
1896	3 月 軽い脳溢血の発作。4 月 経過良好。5 月 7 日 ブラームスに誕生日祝いの手紙を書くが、絶筆となる。 16 日 再び脳溢血の発作。5 月 21 日 未明に死亡 (76 歳)。 遺骸はボンに運ばれ、シューマンと同じ墓に埋葬される。 ブラームスこの年に肝臓ガンを発病。(明治 29 年)
1897	4 月 3 日 ブラームス死亡。63 歳。

2. クララ・シューマン活動の軌跡 居住地を中心に

2.1 Leipzig ライプツィヒ

2.1.1 Hohe Lilie am Neumarkt

ライプツィヒの街の中心部にあり、東京で言えば銀座目抜き通りにあたる場所。クララの父フリードリッヒ・ヴィークはホーエ・リーリエと呼ばれるこの場所で楽器商とピアノ教師をしていた。ゆりの看板のあるこの店は住居と生徒の宿舎も兼ねていた。ライプツィヒを訪れる演奏家にピアノを供給することによって親交を持ち、ヴィークの家は音楽家たちが常に集まる場所となっていた。1819年9月13日にクララ誕生。



クララの生家（右角の建物）¹⁾



現在の様子（2003年 撮影）

2.1.2 Grimmaische Gasse 36（現在 Salzgäßchen）

1821年、ヴィークは家族が増えるため Neumarkt からはすぐ近くに位置し（徒歩で約5分）市庁舎に続く横丁にある Grimmaische Gasse 36 に引っ越した。ここは Neumarkt 以上に市の中心部にあたる。楽器商はますます繁栄していたが、ピアノ教師としての名声が高まるとともに商売は妻に任せ、クララの教育と生徒の指導に力を入れていた。

クララは9歳前からヴィーク家に集まる音楽家たちの集まりに参加し、新しい曲やさまざま

まな曲を演奏したり聴いたりしていた。

1828年ロベルト・シューマンがヴィークの弟子になり、レッスンに通い始めている。ロベルトは1829年ハイデルベルクの大学で法律を学ぶが、1830年再びライプツィヒに戻りヴィークの家に住み込んで音楽に専心する。

1831年のパリ演奏旅行でクララはショパンに会っているが、1835年10月、ショパンがクララやヴィークと再会するために、またロベルトに会うためにヴィーク家を訪れている。

2.1.3 「ライプツィヒ中央駅」

ライプツィヒ中心部のすぐ北側（徒歩約15分）に鉄道の「ライプツィヒ中央駅」がある。ドイツの鉄道は1835年（クララ16歳）に開業しているが、それまでは主に「乗合馬車」で演奏旅行を行っている。当時、自家用馬車を所有していたのはごく一部の階級だけだった。馬と御者がつきたいいわゆるレンタル馬車もあったが、距離に関わらず途中で馬の交換が出来ず、遠距離に行く場合は、馬が疲れないようゆっくり歩くという不便さがあった。一般的には「郵便馬車」とも呼ばれる「乗合馬車」の利用が多かった。市中では「辻馬車」が主に使われていた。クララの演奏旅行は大都市だけではなく、途中の小さな町でも演奏会を行っていたので、鉄道開通後も馬車での旅行が多かったようだ。ヴィークの家から「ライプツィヒ中央駅」までは歩いて15分ほどの距離。クララは1837年2月から、北ドイツを廻る大がかりな演奏旅行を行ったが、その際まずベルリンまでは汽車で行っている。当時ドイツには5000kmの鉄道網があった。

2.1.4 「カフェ・バウム」

ライプツィヒの街の中心部、トーマス教会の近くにあるカフェ・レストラン。ライプツィヒ在住の音楽家達はもとより、ライプツィヒを訪れる音楽家たちが集い、音楽談義に花を咲かせていた。ヴィークは子供のクララを時々夜にも連れて行き、音楽仲間に参加させていた。14歳頃のクララはロベルトとヴィーク家で、散歩で、カフェ・バウムで毎日のように顔を合わせていた。結婚後も夫婦でよくこの店を訪れたと思われる。店内の奥のテーブルの角にシューマンはいつも座り、肘をテーブルにつき体をやや傾けて、ワインを飲んでいただ。いつもは無口だが、興に乗るとよく話したという。この「カフェ・バウム」には今も「シューマンの席」の表示があり、彼が好んで食べたメニューも作られている。



「カフェ・バウム」の建物とシューマンが座っていた場所
(2003年 撮影)

2.1.5 Schönefeld シェーネフェルト

1840年9月12日、クララが21歳になる誕生日の前日にクララとシューマンはシェーネフェルトの教会で結婚式を挙げる。シェーネフェルトはライプツィヒから東北約5kmに位置する静かな近郊の町。結婚前、クララはすでにウィーンやパリで大成功を収め、女性として初めての「オーストリア帝王室内楽奏者」の称号を持つほどの大ピアニストになっていた。またシューマンも作曲家として認められ始め、「音楽新報」発刊などの音楽活動により、多くの友人や知人がいた。本来ならばライプツィヒの街の中心で挙式するのが当然と思われるが、このライプツィヒから少し離れた辺鄙とも言える町の教会を選んだ理由として2つのことが考えられる。1つは二人の結婚に反対し、裁判で争った父親ヴィークに対する警戒心と遠慮が考えられる。またもう1つの理由は、当時のこの教会の牧師であったヴィルデンハーンがロベルトのツヴィッカウ時代の友人であり、共に学校で学び、音楽の勉強をしていた人物であることだ。二人の結婚を心から祝福し、安心して挙式を委ねられる牧師であったことが当時の二人にとっては大きな理由ではないかと思われる。教会には挙式の記録が残されている。挙式は朝10時に始まったが、ロベルトとクララは馬車でシェーネフェルトに行き、教会の正面玄関の階段を上って行った。この教会は当時の約20年前に擬古の様式で新しく建てられ、まさに出来たての新しい教会であった。ライプツィヒからは音楽仲間をはじめ、大勢の人達が参列に来ていたという。



シェーネフェルトの教会
(2003年 撮影)

2.1.6 Inselstraße 5

現在の住所表示では Inselstraße 18 になっている。1840年9月12日（クララ21歳の誕生日の前日）に結婚した後、ライプツィヒ東部（街の中心部から約1km）に位置する Inselstraße 5 の家の2階フロアを借りて住む。当時は丁度出来たばかりの新しい家で、小さなサロンコンサートを開けるスペースのある居間や仕事部屋があり、ロベルトはこの家で数多くの歌曲、シンフォニー1番と4番（2番目の作曲だが）、ならびにオラトリオ“楽園とペリ”、そして室内楽曲の一群を生み出している。この時期、ロベルトとクララは共にバッハのフーガを分析したり、文学作品を研究したりしている。

この家にはリスト、メンデルスゾーン、ベルリオーズ、そしてその他数え切れないほどの音楽家や文学者達が訪れた。1843年メンデルスゾーンがライプツィヒに音楽院を創設し、ロベルトはピアノとスコア・リーディングの教授として務める。また1844年8月にはクララもライプツィヒ音楽院の教授に加わったが、ロベルトの病状の悪化に伴い、共にこの職を退く。夫婦はこの家に4年間住み、長女マリーと二女エリーゼが産まれている。ロベルトは作曲に専念するため「音楽新報」の編集を人に任せるが、病状が重くなり、1844年12月健康に良いといわれるドレスデンに引っ越すことになる。現在はこの家の2階部分が「シューマン夫妻の家」として展示室になっており、1階部分は「初等学校およびクララ・シューマン音楽学校」として使われている。



新婚時代のインゼル通りの家²⁾



入り口の上に「ロベルトとクララ・シューマンの住居 1840 - 1844」と書かれている。



初等学校および「クララ・シューマン音楽学校」に改築



建物前の改築工事の表示

(2002年 撮影)

2.2. Dresden ドレスデン

2.2.1 Waisenhausgasse 35

Seestraße と記述されている資料もあるが、これは Seestraße との角に位置するためによるものと思われる。現在この場所は Waisenhausstraße 35 に当たり、広い通り沿いの空き地になっており、ドレスデンの中心部、Altstadt (旧市街) に位置する。鉄道のドレスデン中央駅まで徒歩で 15 分ほどの距離。ライプツィヒが活気に溢れた音楽の中心都市であったのに比

べ、バロックの宮廷都市ドレスデンはエルベ河の河畔にあり、ゆるやかな起伏の山々にかこまれた風光明媚な街で、「ドイツのフィレンツェ」と呼ばれていた。1844年12月のこの移転に関してはロベルトの転地療養が大きな目的と考えられている。ロベルトは自宅作曲を教える以外は自分の作曲活動に専念し、数多くの有名な作品を残している。クララの演奏活動はこの2年間、ライプツィヒとドレスデンだけに限られていたが、この時期に作曲されたロベルトのピアノ協奏曲の初演をはじめ、2年間に12回の演奏会に出演している。鉄道を使えば、ドレスデンからライプツィヒまで当時4時間であった。また「3つのプレリュードとフーガ」など、作曲にも力を入れている。この家で三女ユーリエと長男エミールが生まれた。

2.2.2 Reitbahngasse 20

1846年9月、ドレスデン中央駅より近く、日当たりの良いReitbahngasse 20に引っ越す。この場所には今も緑の多い集合住宅が並んでいる。ロベルトは自分で組織した合唱団の指導を行っていたが、作曲とその発表に力を入れる。クララもロベルトの作品の演奏や合唱団の伴奏など、ロベルトの音楽活動に協力していたが、彼女はドレスデンの人々のロベルトに対する無関心で冷やかな態度に憤りを覚えたようだ。この家に住んだ4年の間に長男エミールが1歳で亡くなり、二男ルートヴィヒ、三男フェルディナンドが産まれる。

1849年、三男フェルディナンドの出産前、8ヶ月の身重で暴動の中をロベルトと子供たちを連れて非難するという一幕もあった。



Waisenhausstraße 35 現在は空き地



Reitbahngasse 20 現在も明るいアパート

(2003年 撮影)

2.3 Düsseldorf デュッセルドルフ

2.3.1 Alleestraße 782

現在の住所表示では Heinrich-Heine-allee 44, Grabenstraße との角に位置する。

1850年9月、ドレスデンから移転。この場所は街の目抜き通りに位置し、デュッセルドルフの中心部に当たる。ロベルトがデュッセルドルフの市民オーケストラと合唱団の音楽監

督として採用され、また作曲家としてもライブツィヒでの「シューマン週間」、ツヴィッカウでの「シューマン音楽祭」が開催されるほどに名声を上げてきていた。それに伴い、ロベルトに師事するために訪れて来る若者達や、リストなどの音楽家、他の分野の芸術家など、シューマン家を訪れる人々は多かった。ロベルトは音楽活動への意欲と必要性からこの場所を選んだのではないかと思われる。しかしこの場所の周りは余りにも人通りが多く、街の喧騒がかえってロベルトの神経を疲れさせ、病状を悪化させたとの説もある。

2.3.2 Königsallee 252, 4

現在の住所表示では Königsallee 46。1851年7月、以前より静かな家（アパート）に引っ越す。この家には60名を収容できる音楽サロンがあり、7月6日「バラの巡礼」を上演してお披露目をする。この上演はクララによるピアノ伴奏と20名の合唱団のメンバーによるもので、デュッセルドルフの芸術家や多くの知人友人が招待された。

2.3.3 Herzogstraße

1852年4月、それまで住んでいた家が持ち主によって売られるため、仕方なく Herzogstraße に引っ越すが、街の中心からやや離れているため、8月末にはまた移転する事になる。

2.3.4 Bilkerstraße 1032

現在の表示では15。1852年9月から1855年8月までこの家に住む。この家でクララはロベルトに遠慮なくピアノに向かう事が出来る階上の1室を持てるようになった。それまではロベルトの仕事の合間を縫って練習していたようだ。20歳のブラームスがシューマン夫妻を訪れたのもこの家である（1853年10月）。当時“シューマン先生”に師事するために訪れる若い作曲家たちは多く、ブラームスもその中の一人であった。ロベルトは「天才、ブラームスが来訪」と日記に書き、「新音楽時報」に賞賛の言葉で紹介している。ロベルト自身は次第に幻聴や不安定な精神状態に悩まされ、事実上指揮者を辞任。1854年2月、ロベルトはこの家から雨の中をライン川まで歩き、投身自殺を図った。ロベルトが飛び込んだ場所までは、家から歩いて約5分である。当時船橋があり、その橋の上から飛び込んだところを、通りかかった船に助けられたのだ。現在その橋は撤去され、程近い所に鉄骨の大きな橋が作られている。ロベルトがエンデニヒの精神病院に移った後、ブラームスは Bilkerstraße のすぐ近くに下宿し、生活費とロベルトの治療費のために演奏旅行に明け暮れるクララの留守を守り、子供たちや病院のロベルトの様子を旅先のクララに伝えていた。現在 Bilkerstraße 15には音楽家夫婦が住んでおり、中を見ることは出来なかった。以前、この家に「シューマン協会」の事務所が置かれていたが、現在は通りの斜め向かいにある「Heinrich-Heine-Institut Düsseldorf」の中に設置されている。



Bilkerstraße 15



入り口にロベルトとクララのレリーフ

(2003年 撮影)

2.3.5 Poststraße 1315

現在の表示 27、Haroldstraße との角。ロベルトがエンデニヒの精神病院に入った後、広い家が必要でなくなったクララは、Bilkerstraße 1032 から 200 mほど離れた Poststraße 1315 のアパートに引っ越す。ブラームスも同じアパートの1階の1室を借り、クララが演奏旅行に出かけている間は留守を守り、またロベルトを病院まで見舞いに行き、ロベルトの様子をク

Allgemeiner Musikverein.

Donnerstag den 3. März:

Siebentes Concert.

Concert des Hrn. Musikdirectors
Dr. Robert Schumann
im Weiser'schen Saale,

Programm.

- I. 1. Kyrie und Gloria für Chor und Orchester aus einer Messe von R. Schumann.
2. Concert (G-dur) für Pianoforte mit Begleitung des Orchesters von Beethoven, vorgetragen von Frau Clara Schumann.
3. Arie, Recitativ und Duett aus Euryanthe von Weber, gesungen von Fräulein Mathilde Hartmann und Fräulein Sophie Schloss.
4. Symphonie (D-moll) für Orchester von Robert Schumann (Manuscript). (Introduction, Allegro, Romanze, Scherzo und Finale in einem Satz.)
- II. 5. „Vom Pagen und der Königstochter“, Ballade von E. Geibel, für Solostimmen, Chor und Orchester von R. Schumann.

Die Sol's in der Ballade haben Fräulein Hartmann, Fräulein Schloss und mehrere geehrte Dilettanten geübt.

Anfang präcis 6 1/2 Uhr.

Die Haupt-Orchesterprobe findet statt Dienstag Abends 6 Uhr, wozu die Vereins-Mitglieder gegen Vorzeigung ihrer Karten, sowie die Mitglieder des Gesang-Musik-Vereins Zutritt haben.

Der Verwaltungs-Ausschuss.

Programm

zu der

musikalischen Soiree,

welche Frau Clara Schumann und Herr Hof-Concertmeister Joachim aus Hannover am Sonnabend den 29. October 1853 im Saale des Herrn Cürten geben werden.

- I. 1. Sonate (D-moll) für Pianoforte und Violine von R. Schumann, vorgetragen von Clara Schumann und Joseph Joachim.
2. Arie aus Figaro's Hochzeit von Mozart, gefungen von Fräulein Marie Carl.
3. a. Etude (C-dur) von F. Chopin, b. Andante (Canon) von R. Schumann, c. Lieb ohne Worte (A-dur) von Mendelssohn, vorgetragen von Frau Clara Schumann.
- II. 4. Fantastie für die Harfe über Thyraus aus Oberon von Parry - Alford, vorgetragen von Fräulein Marie Prietz.
5. Zwei Capricen: 1. Andante, 2. Tema con Variationen für Violine von Paganini, vorgetragen von J. Joachim.
6. Zwei Lieder: „Waldnacht“ von R. Schumann und „Stechen, wo bist du?“ von F. Racine, gefungen von Fräulein Marie Carl.
7. Sonate (A-moll op. 47) für Pianoforte und Violine von E. von Beethoven, vorgetragen von Clara Schumann und J. Joachim.

Anfang 6 1/2 Uhr, Ende 8 1/2 Uhr.

Billets zum Subscriptionspreise von 20 Sgr. sind in der Musikalienhandlung von Wappler zu haben.

Cafépreis à Billet 1 Tzfr

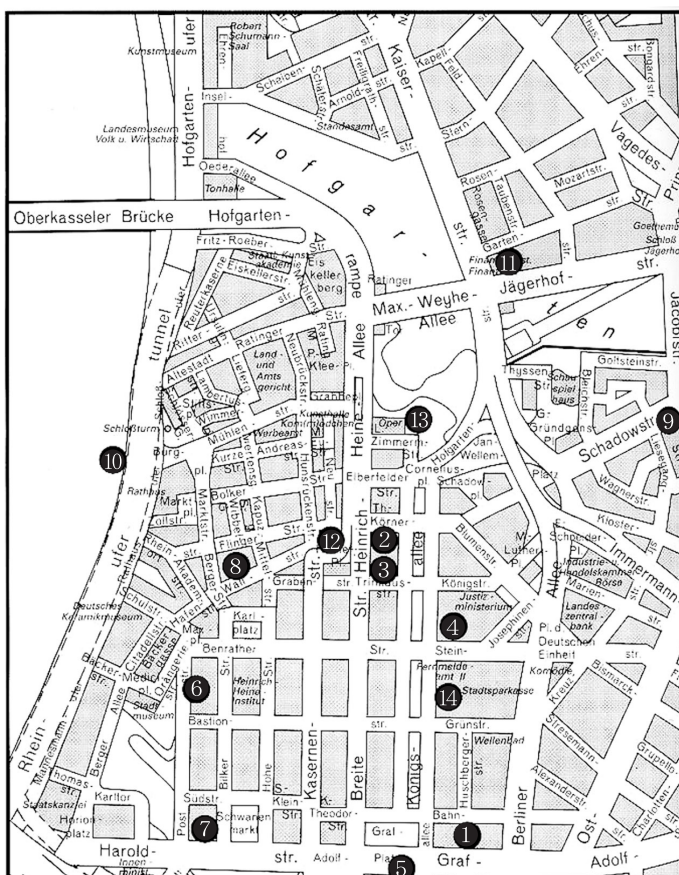
Mit. 1853. Programm. 1. 1853.

(左) 1852 / 1853 ロベルトが音楽監督を務めたコンサートのプログラム。1853年3月3日、クララがベートーヴェンのピアノ協奏曲を演奏。

(右) 1853年10月29日クララが出演した演奏会のプログラム。³⁾

ララや友人たちに知らせていた。クララが面会することは、ロベルトが興奮して病状を悪化させるとして禁止されており、ロベルトが亡くなる2日前にやっと面会を許される。ロベルトが精神病院に入院していた2年間、ブラームスはほとんど作曲をしていない。BilkerstraßeもPoststraßeもほぼ街の中心部にあり、ライン川に近く、瀟洒なアパートが並んでいる便利な場所である。ロベルトが健康な人物であったなら、おそらくこの街で音楽家として活躍し、子供たちを育て、1つの充実した、幸せな時代を過ごしたのではないと思われる。クララはこの街を7年間で離れることになる。

[デュッセルドルフ市街図]



- ①ケルン・ミンデナー駅：当時の鉄道の駅。現在のグラフ・アドルフ・プラッツの近くにあったが今はこの通りの東にあるデュッセルドルフ中央駅に移っている。1950年9月2日、シューマン一家が到着した際、ここで歓迎祝賀を受けた。
- ②ホテル・ブライデンバッヒャーホーフ Alleestraße777（現在の Heinrich- Heine-allee）：1850年9月初め、デュッセルドルフに移って来たシューマン一家が滞在したホテル。その後もこのホテルで頻繁に友人達と会っている。

- ③ Alleestraße 782 (現在の Heinrich-Heine-allee 44, Grabenstraße との角。Trinkaus&Burkhardt 銀行の場所) : 1850年9月から1851年6月までのシューマン一家の最初のアパート。
- ④ Königsallee 252,4 (現在 46、パフラート画廊の場所) : 1851年7月6日、新しいアパートに於いて、シューマンの“バラの巡礼”の上演による音楽サロンの落成。
- ⑤ Herzogstraße : 1852年4月から8月までのシューマン一家のアパート。
- ⑥ Bilkerstraße 1032 (現在 15) : このアパートにシューマン一家が1852年9月1日から1855年8月初めまで住んだ。ほぼ完全に保存されているデュッセルドルフで唯一の住居。
- ⑦ Poststraße 1315 (現在 27、Haroldstraße との角) : 1855年8月6日から1857年9月まで、ここにクララは子供達と住んだ。同じアパートの1階にブラームスも住んでいた。
- ⑧ キュルテンシャー・ザール : Berger Straße クララはこのホールで度々演奏会を行っていた。
- ⑨ ガイスラーシャー・ザール : Flingersteinweg (現在 Schadowstraße;旧トーンハーレ) 1852年8月1、2、3、4日このコンサートホールで音楽監督ロベルト・シューマンによる“大合唱祭”が開催された。その他にも数多くのコンサートを行っていた。
- ⑩ シッフス橋(船橋) : ロベルトが投身自殺を図った橋。
- ⑪ Jägerhofstraße Nr.7 : ベンデマン夫妻の家。クララはデュッセルドルフを離れた後もクリスマスにこの夫妻を訪れ、また演奏旅行の拠点として滞在することが多かった。
- ⑫ Alleestraße 729 (現在 Heinrich-Heine-allee) : クララの友人、盲目のロザリエ・レーザーの家。ロベルトが投身自殺を図った時、身重のクララは医師の指示でロザリエ・レーザーの家にロベルトが病院に入るまで五日間滞在する。デュッセルドルフを離れた後も度々訪れている。
- ⑬ シューマン記念碑 : デュッセルドルフほぼ中央にあるホーフガルテンのオペラハウスすぐ近くに、1956年、カール・ハルトゥンク作のシューマン記念碑が設立された。
- ⑭ クララとロベルトの記念板 : ケー画廊に保存されている。



1853年、ロベルトからクララへの⁴⁾
クリスマス・プレゼントの油絵
Carl Ferdinand Sohn 作

2.4 Bonn ボン

2.4.1 エンデニヒ精神病院

1854年2月末、ロベルトがライン川に投身自殺を図り、その後6日目にエンデニヒの精神病院に入ることになる。エンデニヒはデュッセルドルフから約60km離れている。ロベルトは約2年半の入院の後エンデニヒで亡くなるが、クララはロベルトを興奮させるとして医師から面会を禁止され、ロベルトが亡くなる2日前にやっとエンデニヒを訪れている。エンデニヒには友人や知人が面会に行き、ロベルトの様子をクララに伝えていた。ブラームスが見舞いに来た折、ロベルトはボンの中央駅近くまでブラームスを散歩しながら見送り(徒歩で約1時間)、ベートーヴェンの像の前で別れたという。エンデニヒの精神病院は現在「シューマン・ハウス」として1階部分は図書館に、2階部分はシューマンに関する展示室になっている。シューマンが使っていた二部屋続きにはピアノが置かれ、窓からは教会と遠くの間々が望める。

2.4.2 シューマン夫妻の墓

1856年7月29日にシューマンが亡くなり、遺体は大勢の友人や市民達の見守るなかでボ

ン市内にある墓地に埋葬された。その後 1880 年、「シューマン音楽祭」の一環として、アドルフ・ドンドルフにより設計され、友人や彼を崇拝する人々の寄付で出来上がったシューマン記念碑の除幕式が、墓地にて行われた。1896 年、フランクフルトで亡くなったクララの遺骸はこの墓地まで運ばれ、埋葬されている。白く美しい彫刻が施されたこの記念碑には「ROB.SCHUMANN」の文字だけが記され、記念碑の手前に横たわる墓石には「ROBERT SCHUMANN」と「CLARA SCHUMANN」の名前が書かれている。



墓地の記念碑⁵⁾

2.5 Berlin ベルリン

2.5.1 Dessauerstraße 2

クララはロベルトの死後どこを定住地にすべきか迷っていたが、1857 年デュッセルドルフを離れ、ベルリンの母の元へと移る。上の二人の息子はボンの寄宿舎に残ったが、あの子供達はベルリンで暮らすことになる。クララ自身は演奏旅行に明け暮れ、母や友人が子供たちを見ていたが、長女マリーは幼い子供達や家事の世話を出来る年齢になっており、「母親代理」を務めていた。ベルリンは地理的にはロシアを含むヨーロッパの中心であり、交通

の便では鉄道網など非常に便利な都市で、クララの活動の拠点として最適な場所であった。この住居は街の中央、ブランデンブルク門の少し南に位置していて、四女オイゲーニエは後に「ベルリンの中心部にある、中庭に面した大きな窓から日の当たる住居に引っ越した。そこには私たちの練習用のアプライトピアノと、居間には美しいグランドピアノがあった。」と述べている。

クララの母マリアンネ・バルギルは、クララが4歳8ヶ月の時にフリードリッヒ・ヴィークと離婚している。クララは5歳になるまでの4ヶ月間、母親の元にいたが、5歳になるとともに法律の定めにより、父親に引き取られる。母親を失ったクララは心のよりどころを音楽に向けていたと思われる。クララは、ロベルトとの結婚を父親から反対され決裂した時、父親の元を離れてベルリンに住む母親の所に身を寄せている。クララは幼くして母親と別れることになったが母娘の絆は強く、クララは生涯にわたって母親を頼りとしていた。クララにとって母親のいるベルリンが、最も安心して住める街だったのではないだろうか。

2.6 Baden-Baden バーデン・バーデン

2.6.1 Lichtental Nr.14

現在の住所表示は Hauptstraße 8。1862年10月、友人である名歌手ポーリーヌ・ヴィアルドの薦めでバーデン・バーデンに家を購入。1863年5月から住み始め、夏には子供達全員を集めていた。クララがこの家にいるのは夏の間だけで、秋からのシーズンはほとんど演奏旅行に出かけていたようだ。バーデン・バーデンは当時からヨーロッパの高級保養地として有名であり、コンサートホールや劇場、美術館、カジノ等があり、ローマのカラカラ帝が湯治に来たクアハウスもある。クララはこの地で各界名士とも親交を結んでいる。

2.6.2 ブラムス・ハウス Lichtentaler Allee 136

現在の住所表示は Maximilianstraße 85。ブラームスは1863年から1874年まで、夏の数週間あるいは数ヶ月をバーデン・バーデンに滞在する事が多かった。1865年からは現在「ブラームス・ハウス」と呼ばれているこの家に部屋を借りていた。この家はクララの住居前の通りを15分程歩いた、少し小高い場所にあり、ブラームスが借りていた2階の部屋からはこの道がよく見える。ブラームスはバーデン・バーデンにいる間は毎日のようにクララの家を訪れ、お茶や食事を共にしていた。またクララが演奏旅行に出ている間、クララの代わりに生徒にピアノを教えることもあった。ドイツに残っているブラームスの住居跡はこの家だけであり、ブラームス協会の管理のもとで遺品や資料が展示されている。

2.7 Berlin ベルリン

2.7.1 In den Zelten 11

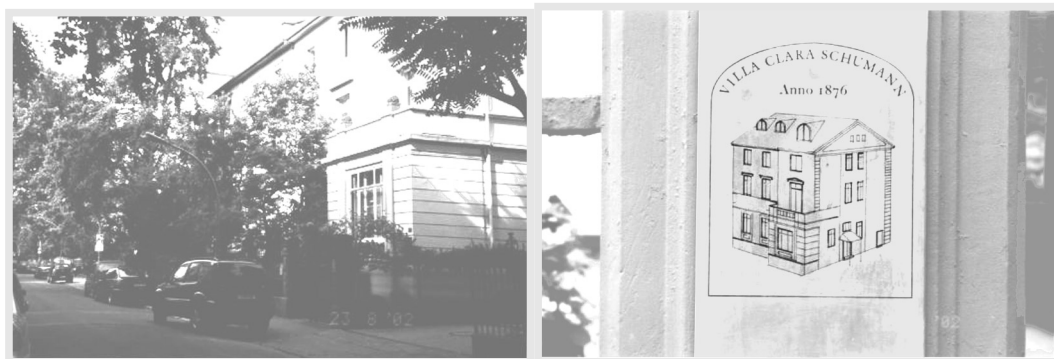
街の中央、ブランデンブルク門のすぐ西、現在のコングレスハレ（会議場）のすぐ近くに当たる。1873年11月、クララはバーデン・バーデンを離れ、再び交通の便の良いベルリン

を活動の拠点として選び引っ越す。ベルリンには二人の息子、フェリックスとフェルディナンドが住んでいた。クララが常に頼りとし、子供達を見てくれていた実母マリアンヌ・バルギールが1872年3月にベルリンで亡くなっており、この二人の息子の傍にいても、ベルリンを選んだ理由と思われる。

2.8 Frankfurt am Main フランクフルト・アム・メイン

2.8.1 Myliusstraße 32

1878年9月、フランクフルト音楽院教授への招聘に応え、移転する。すでに32歳になり、母親の片腕となっていた長女マリー、27歳の四女オイゲーニエ、結核を患い瀕死の状態の末子フェリックスと共に住む。Myliusstraßeは市の西部に位置する閑静な住宅街にある。現在もこの家は残っており、一般の人の住居になっていて中に入ることは出来ない。



Myliusstraße 32 の住居

入り口に「クララ・シューマンの家」の表示

(2002年 撮影)

2.8.2 フランクフルト音楽院

クララの家からフランクフルト音楽院までは歩いて約15分。

1878年に学校が開校した時、クララは教授たちの中で唯一人の女性であったが、主任教授として招聘される。クララの生徒はドイツ国内はもとより世界中から集まり、シカゴ、ニューヨーク、フィレンツェ、エディンバラ、ロンドン、ウィーン等の出身者が名簿に見られ、特にイギリスからは大勢来ている。マリーとオイゲーニエもクララの助手として音楽院に勤めていた。2年後の1880年にはさらに二人の女性が教授職に迎えられ、この年から女性のための作曲クラスも作られている。

3. 演奏活動の記録

3.1 驚異的スケジュール

クララは1830年(11歳)、ライプツィヒ・ゲヴァントハウスでのデビューに始まり、

1891年（72歳）フランクフルトでの最後の演奏会まで60年以上にわたって演奏活動を行っている。結婚するまでのクララ・ヴィーク時代では、娘を世界的ピアニストにするという父親の野心によりパリやウィーンで大成功を収め、ショパンやリストと並ぶ程までに至っている。1835年（16歳）ドイツに鉄道が開設されたが、小都市を廻るには馬車が主に使われていた時代である。

1840年から1854年の14年間の結婚生活において、8度の出産、子育て、病弱な夫への気配りに加え、夫ロベルトの仕事の補佐、研究、作曲、指導といった仕事をこなし、クララの生涯の中では比較的演奏活動が少ない時期であるが、それでもこの14年間に139回もの公開演奏会を行い、常に妊娠しているような状態であった。

1854年3月ロベルトがエンデニヒの精神病院に入院した後、6月に末子フェリックスの出産を終えると、クララは驚異的な演奏旅行を始める。

1854年7月から12月の日程⁶⁾

月日	滞在地	内容
7月	ベルリン	三女ユーリエを実母マリアンネ・バルギールに預ける
8月	ブリュッセル、オステンデ	数回の演奏会と休暇
10月16日	ハノーファー	宮廷での演奏会
19日	ライプツィヒ	ゲヴァントハウス演奏会
23日	ライプツィヒ	ゲヴァントハウス演奏会
27日	ワイマール	リスト指揮による演奏会
11月3日	フランクフルト・アム・マイン	演奏会
4日	フランクフルト・アム・マイン	演奏会
数日	デュッセルドルフ	子供達に会いに立ち寄り
13日	ハンブルク	フィルハーモニーとの3回の共演
15日	アルトナ	演奏会
16日	ハンブルク	演奏会
18日	リュベック	演奏会
21日	ブレーメン	演奏会
23日	ベルリン	演奏会
29日	ブレスラウ	演奏会
12月1日	ブレスラウ	演奏会
4日	ベルリン	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
7日	フランクフルト・アン・デア・オーデル	演奏会
10日	ベルリン	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
16日	ベルリン	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
20日	ベルリン	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
21日	ライプツィヒ	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
22日	デュッセルドルフ	クリスマスで帰宅

クララが1854年から翌年にかけて得た収入は、ロベルトがデュッセルドルフで得た収入の4年以上に相当する。ロベルトの入院費、息子たちの寄宿舎費用（現在の金額にして、一人につき1ヶ月約20万円必要）、家庭教師、家政婦など、後には孫の養育費もクララの肩にかかっていた。これらの費用を作るために驚異的な演奏会スケジュールをこなしていたことは十分に考えられるが、クララ自身友人に「音楽に没頭し、忙しく仕事をしている時、悲しみや苦しみをしばし忘れることが出来る。」と述べている。後には3人の息子と4人の娘

のうち、2人の息子は死亡、1人は精神病院に入り、娘1人も亡くなっている。

生きるための活動と、世界的ピアニストとしての活動と、悲しみを忘れるための活動、これら全てがクララを動かしていたのではないだろうか。1854年以降、クララの活動はますます激しくなる。

1832年から1888年までの期間に
演奏旅行を行った国々（ドイツ以外）⁷⁾

年	国
1832	フランス
1837~38	オーストリア、ハンガリー
1839	フランス
1842	デンマーク
1844	ロシア
1846~47	オーストリア、ハンガリー
1853	オランダ
1854	ベルギー
1855	オランダ
1856	オーストリア、ハンガリー、イギリス、デンマーク
1857	イギリス、スイス
1858	スイス、オーストリア、ハンガリー
1859	オーストリア、イギリス、
1860	オランダ、オーストリア
1861	ベルギー
1862	スイス、フランス、ベルギー
1863	オランダ、フランス、ベルギー
1864	ロシア
1865	ボヘミア、イギリス
1866	オーストリア、ハンガリー
1867	イギリス
1868	ベルギー、イギリス、オーストリア、ハンガリー
1869	オランダ、イギリス、オーストリア
1870	イギリス
1871	オランダ、イギリス
1872	イギリス、オーストリア、ハンガリー
1873	ベルギー、イギリス
1876	オランダ、イギリス
1877	オランダ、イギリス、スイス
1879	スイス
1880	スイス
1881	イギリス
1882	イギリス
1883	オランダ
1884	イギリス
1886	イギリス
1887	イギリス、スイス
1888	イギリス

3.2 演奏プログラム

クララ・シューマンの演奏会プログラムを見ると、そのレパートリーの多さに驚かされる。1854年にロベルトがエンデニヒに入院して以来、クララのめまぐるしい演奏活動が始まり、演奏旅行に明け暮れているが、その毎日の中で演奏会のための練習や準備を行っていた。次に演奏プログラムの具体的1例として、1856年5月27日から6月26日までの約1ヶ月間の演奏会プログラムを記載する。この頃は入院中のロベルトの様態がますます悪くなり、悲しみと不安に押し潰されそうになっている時期である。

1856年5月27日～6月26日の演奏プログラム⁸⁾

月日	場所	曲目
5月27日	Hanover Square Rooms (London)	Bach: Prelude and Fugue in A minor Chopin: Nocturne in C minor, Polonaise in A flat Mendelssohn: Presto scherzando Schumann: Jagdlied Op.82, Schlummerlied Op.101
28日	Camberwell Hall (London)	Beethoven: Sonata Op.26 Chopin: Nocturne in E flat, Impromptu A flat Mendelssohn: Lieder ohne Worte, Variations sérieuses Schumann: Fantasiestücke Op.12 (Des Abends, Traumeswirren, In der Nacht)
30日	Concert Rooms (Dublin)	Mendelssohn: Concerto Op.40
31日	Concert Rooms (Dublin)	Beethoven: Sonata Op.31 No.2 Chopin: Nocturne in E flat, Impromptu A flat Mendelssohn: Lieder ohne Worte, Variations sérieuses
6月10日	Willis's Rooms (London)	Chopin: Barcarolle Op.60, Deux valse Op.64
11日	Beethoven Rooms (London)	Beethoven: Sonata Op.27 No.2 Schumann: Trio No.1 Op.63
13日	Hanover Square Rooms (London)	Weber: Konzertstücke
17日	Hanover Square Rooms (London)	Scarlatti: Clavierstücke in A major Beethoven: "Eroica" Variations Bennett: Two Diversions Op.17 Brahms: Sarabande and Gavotte (in the style of Bach) Clara Schumann: Variations on a Theme of Robert Schumann Op.20 Schumann: Carnaval
18日	Beethoven Rooms (London)	Schumann: Piano Quartet Op.47
20日	Beethoven Rooms (London)	Moscheles: Hommage à Handel for two pianos
24日	Willis's Rooms (London)	Beethoven: Sonata in G major for violin and piano Chopin: Nocturne in E flat Mendelssohn: Lieder ohne Worte
26日	Willis's Rooms (London)	Bach: Chromatic Fantaisie and Fugue Beethoven: Sonata Op.27 No.1 Chopin: Etude Henselt: Berceuse and etude Schubert: Two Moments musicales Mendelssohn: Variations sérieuses Schumann: Romance Op.32, : Studien für den Pedal-Flügel Op.56



クララ・シューマンの手の型
(2003年 ツヴィッカウ・シューマン・ハウスで撮影)

結び

本研究においてクララ・シューマンの軌跡を辿り、彼女の人生を追ってみたが、彼女の活動における行動範囲の広さと密度の濃さに、あらためて驚かされ、敬服させられた。そして、その華々しい活動の陰に、悩み苦しみながら人生に挑んでいく人間クララ・シューマンの姿が浮き彫りにされた。クララを駆り立てたものは芸術へのひたむきな探究心であり、芸術を広め伝えるという使命感であり、また家族を養い守る責務でもあった。クララの活動を支えたものはまず彼女を取り巻く人々であろう。彼女を世界的ピアニストに育てた父親ヴィーク、共に音楽活動を深め広めたロベルト・シューマン、クララ5歳の時に別れながら終生クララの支えとなった母親マリアヌ・バルギール、一生結婚せずクララの片腕を務めた長女マリイ、常につかず離れずクララを守るブラームス、そしてさまざまな形で協力を惜しまない多くの友人達。クララが居住地を決めるに当たり考慮した点は、音楽活動により効果的な場所ということもさることながら、夫の健康や子供達の世話を重点的に考えていたと思われる。今回は紙面の関係上、クララ・シューマンの活動の一部しか紹介出来なかったが、全体像はある程度把握して頂けるのではないだろうか。

参考文献

- ・ Reich, B, Nancy 「Clara Schumann The Artist and the Woman」 Newyork, 1985.
(高野茂訳、『クララ・シューマン 女の愛と芸術の生涯』、音楽の友社、1988.)
- ・ Lépront, Catherine 「Clara Schumann」 Paris, 1988. (吉田可南子訳、『クララ・シューマン 光にみちた調べ』、河出書房新社、1990.)
- ・ 原田光子、『真実なる女性 クララ・シューマン』、ダヴィッド社、1970.
- ・ Dieter Kühn 「Clara Schumann, Klavier-Ein Lebensbuch-」 Fischer taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main, 1998.
- ・ Eva Weissweiler 「Clara Schumann-Eine Biographie-」 Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1992.
- ・ 「Clara Schumann, Chronik in Bildern」 Heinrich-Heine-Institut, Düsseldorf, 1996.
- ・ 「Zum 150.Hochzeitstag von Clara und Robert Schumann」 Evangelisch-lutherischen Gedächtniskirche Lipzig-

Schönefeld, 1990.

- ・ 「Clara Schumann 1819-1896, Katalog zur Ausstellung des Stadtmuseums Bonn und des Robert-Schumann-Hauses Zwickau in Verbindung mit dem Heinrich-Heine-Institut Düsseldorf aus Anlaß des 100.Todestages von Clara Schumann」 Bonn, 1996.

引用

- 1) 「Zum 150.Hochzeitstag von Clara und Robert Schumann」 Evangelisch-lutherischen Gedächtniskirche Lipzig-Schönefeld, 1990. S.18
- 2) 「Zum 150.Hochzeitstag von Clara und Robert Schumann」 Evangelisch-lutherischen Gedächtniskirche Lipzig-Schönefeld, 1990. S.24-25
- 3) 「Clara Schumann 1819-1896, Katalog zur Ausstellung des Stadtmuseums Bonn und des Robert-Schumann-Hauses Zwickau in Verbindung mit dem Heinrich-Heine-Institut Düsseldorf aus Anlaß des 100. Todestages von Clara Schumann」 Bonn, 1996. S.204
- 4) 「Clara Schumann 1819-1896, Katalog zur Ausstellung des Stadtmuseums Bonn und des Robert-Schumann-Hauses Zwickau in Verbindung mit dem Heinrich-Heine-Institut Düsseldorf aus Anlaß des 100. Todestages von Clara Schumann」 Bonn, 1996.S.216
- 5) 「Clara Schumann, Chronik in Bildern」 Heinrich-Heine-Institut, Düsseldorf, 1996. S.42
- 6) Reich, B, Nancy 「Clara Schumann The Artist and the Woman」 Newyork, 1985.
(高野茂訳、『クララ・シューマン 女の愛と芸術の生涯』、音楽の友社、1988.) S.285
- 7) Reich, B, Nancy 「Clara Schumann The Artist and the Woman」 Newyork, 1985.
(高野茂訳、『クララ・シューマン 女の愛と芸術の生涯』、音楽の友社、1988.) S.556
- 8) 「Clara Schumann 1819-1896, Katalog zur Ausstellung des Stadtmuseums Bonn und des Robert-Schumann-Hauses Zwickau in Verbindung mit dem Heinrich-Heine-Institut Düsseldorf aus Anlaß des 100.Todestages von Clara Schumann」 Bonn, 1996.S.255-256